

地域通貨とコミュニティ (3)

別府大学文学部人間関係学科
教授 秋田 清

1 座談会再開

卒業後、横浜で仕事をしているE君が久しぶりに帰ってきた。

E男：こんにちは。お久しぶりです。

X先生：やあ、しばらく。元気そうですね。

E男：元気です。先生も変わりませんね。

X先生：いやあ、足腰弱って、もう歳ですよ。

E男：いや、いや、まだまだ。ところで、卒論はどうでしたか。Iさんも、K君も卒業したんだよね。卒論はどんなこと書いたの。

I子：色彩について。「現象学的色彩論」とか、なんとか。

E男：へえー。K君は。

K男：「マックス・ウェーバーの合理化論」

E男：あーそーか。K君は社会学コースだったね。そこへ、卒業生のBさんとDさんが入ってきた。

B子：オッス、みんな元気。Eちゃん、元気そうやねえ。変わらんねえ。おじいちゃんも元気？まだ、くたばりそうにないねえ。良かった、良かった。ハイ、私も元気でーす。

I子：相変わらず、元気というか、騒々しいというか。

B子：いいの、いいの。呑み行こう。

F子：えっ、今日は何なんですか。ずいぶんにぎやかですけど。

大学院の授業が終わった、Fさんが入ってきた。

F子：Eさん、大学院にはいつ戻ってくるんですか？

E男：どうしようかな。

F子：私たちがいる間に、戻ってきてくださいよ。

E男：えっ。そしたら、あなたたちが先輩になるわけだ。いやだよ。「こんなこともわからんの」とか、「これ読んでないの」とか言っていじめられるに決まっているからね。

B子：そんなこと言ってたら、勉強はできません。早く戻ってきなさい。

D子：いいよ、無理して戻ってこんでも。元気に魚屋さんやってなさい。たまに帰ってきた方がみんな喜ぶし。

I子：先生、そろそろ始めんと。

K男：何か始まるんですか。

I子：ほら、例の座談会の続きよ。

B子：えっ、まだ続きやるの、地域通貨やら、私、もう知らんからね。

X先生：大丈夫。この前の続きで、地域、コミュニティなどが中心だから。

2 討議型民主主義

K男：そういうことなら、その前にちょっと聞きたいことがあります。

X先生：えっ、なに？

K男：『地域社会研究』11号は「プラーヌク スツェレ」の特集でしたが、その話しですが、いいですか？

B子：なに？ その「ぷら」何とかいうの。

X先生：英語で言えば、“Planning cell”、直訳す



れば「計画細胞」。内容は、そのうち出てくるでしょう。

E男：それ、私も送ってもらいましたが、先生は、何も書いていらっしやらなかったのですが、なにか一言あってしかるべきだったと思いますが。興味ないのですか？

X先生：そんなことはありません。

D子：また、形式だけで、中身が無いとか言うんでしょう。

X先生：そんな露骨なことは言わない。

D子：言わないけど、思っている？

X先生：相変わらず、口だけは。誰に似たのか。

K男：あの一、卒論審査のとき、V先生に指摘されたことは、そのことと関係があったんですよね。実は、卒論で「ウェーバーの合理化論」を取り上げて、審査のとき、副査のV先生から『ウェーバーからハーバーマスへ』¹¹を読んだか、と訊かれたのですが、読んでなかったの、あわてて読みました。でも、訊かれたことの意味が解りませんでした。

I子：K君、いつもおとなしいのに、今日は怒ってるね。そんなにやられたの？

K男：いや、そんなことはないのですが、佐藤さんの議論も、V先生の質問も、ちょっとずれてるんじゃないかと思うんです。

F子：わあー、こわいな。わたし、帰っていいかな。

I子：K君、がんばれ。遠慮しないでいいよ。

K男：いや、そんなに言うほどのことじゃありません。でも、たとえば、「相互主体的な共同性への契機は、目的合理性あるいはシステム合理性という価値理念にもとづいて形成されている現代社会の位相との意識的な対抗関係のうちに存在する」(佐藤、1986、p.152)とおっしゃっているのですが、佐藤さんのおっしゃっていることはわかりますが、それをウェーバーの批判として語るの、筋違いではないかと思うんですが、どうなんでしょう。

I子：えーと、佐藤さんが言いたいことはわからんでもないけど、なんか変ですね。

K男：それとですね、佐藤さんの「分析視点が官僚制対アソシエーション、あるいは行為論レベル

で言えば目的合理的行為対対話的行為という対抗的パラダイムである」(同上)と言われるんですけど、それ自体は良いんですけど、それは、「ウェーバーからハーバーマスへ」ですか？ ウェーバーは、「目的合理性あるいはシステム合理性」を主張したり、提起したりしたわけではありませんよね。現代社会がそうなっていると捉えただけです。

X先生：それはそうですね。ただ、佐藤さんが、「相互主観的」ではなく「相互主体的」という表現で提起しようとしたことは、ボランティアを強調することからしても、面白いと私は思いますけどね。だから、そういうことを、不正確ですけど、「ウェーバーからハーバーマスへ」と表現してみたのではないですか。「相互主体的」とは何か、という問題は残りますけどね。

K男：ハイ、だから本題は、これからです。

B子：「これから」？ なんかもみんな、卒論書くと人が変わるね。変わらんかったのは私だけか。

D子：私もでーす。卒論くらい軽く書かんと。

K男：プラヌクスツェレの話で、一番気になることは、「理性的な結論」などが語られていることです。プラヌクスツェレは、簡単に言うと、無作為抽出で人を集めて、小グループで4日間くらい同じメンバーで、主に行政的な問題について討議して結論を出すということでしょう。参加しやすいように「日当」を出す。これで出てきた結論が、どうして「理性的な結論」だといえるのですか？

X先生：少人数で、4日間というのが「味噌」なんでしょう。情報がみんなに提供され、みんなが問題を理解するようになれば、最初は、専門家面をしていた人も、特別の存在ではなくなる。自分の利害関係に基づいて発言していた人も、長時間話し合っていると、化けの皮がはがされる。まあ、妥当な結論がでる、ということでしょう。

K男：だけど、「理性的」というのはどうでしょうか。

X先生：「理性的」は変でしょうね。「理性的な結論」であれば、わざわざ討論なんかしないでも、誰かが探し出せばよいのですからね。そんなものがあつたら話ですが。

¹¹ 佐藤慶幸『ウェーバーからハーバーマスへ—アソシエーションの地平』世界書院、1986年。

K男：それから、非当事者による討議だから公平な結論が出るといえるのですか。第一、私が当事者だったら、関係ない奴が余計な口出しをするなって言いたくなりますけど。この点は特に、ハバースマスとはずいぶん違いますね。彼のは、当事者による討議ですよ。

X先生：まあ、岡目八目という言葉もありますから。でも、「理性」とか「公平」などという理念に対する幻想があるのでしょうか。あるいは「理性的」というのは、英語で言うと、「reasonable」の誤訳かもしれません。「reasonable price」とかいうときの「リーズナブル」です。「無理のない」、「大方の人が妥当だと思う」という意味です。

K男：それでも問題は残りますよね。

X先生：今日は、K君、なかなか妥協しませんね。

K男：だって、非当事者だから「公平」なんていうと、まるで「公平な第三者」などが現実にいるみたいに聞こえますし、現在の代議制民主主義などは、1人1票で、公平そのものでしょう。「公平」なんて、所詮そんなものでしょう。「1票の重さ」が平準化されたって、同じことだと思うんですよ。

X先生：なるほど、アダム・スミスの「公平な観察者」というのも、社会的な判断ということであって、「公平な観察者」が名札つけて歩いているわけではないですからね。人が利己的であるということが前提で、より多くの人に加われば、妥当な判断に近づくということですね。彼が言うのは「折り合い」の世界です。だから、上級の裁判に訴えることが出来るということになっている。もっとも、最高裁の判断でも承服しかねることもあるという指摘が、私は面白いと思うのですが。

E男：その時は、どうするのですか？

X先生：自分は良心に恥じることはない、自らを慰める。

E男：そのときの「良心」ってなんですか？

X先生：社会関係の内面化したもの。

E男：えっ、それだと堂々巡りになりませんか。

X先生：そうともいえる。でも、「内面化」だから、いろいろありうる。

E男：その問題は、common sense（共通感覚、常識）の問題とすくなくとも論理的には関係ありませんね。

X先生：あるけど、それはまたにしよう。



もうひとつ、K君が言った、代議制民主主義の問題だけど、男女の差別や所得（納税額）による差別が撤廃されて、一定年齢以上の人にすべて一人1票で選挙権と被選挙権が与えられれば、政治的にどうか、形式的には平等だといえますね。でも、社会生活における男女の差別や所得の差がなくなったわけではないし、経済的利害関係やそのほかの対立がなくなったわけではなくて、所詮、利害関係や対立の調整でしかないわけですからね。

K男：そうですけど、その調整という観点で、討議民主主義が代議制民主主義に比べてどれほど優れているかという問題があると思うんですけど。

E男：どうせ、墮落し、腐敗する？

K男：というか、逆だという感じがするんですけど。内容がまずあるんじゃないですか。それに、うまく言えませんが、人が集まって、「理性的」で「公平な」結論に到達したとしたら、なんか気持ち悪くないですか？

E男：それは、猥褻だと。あるいは、政治は所詮腐敗そのものだという話ですか？

K男：ええ、まあ。そこまでいって言いすぎのような気がしますけど。

B子：えっ、なんかよくわからんけど。ほら、おじいちゃん、コーヒーばかり飲んでないで、解説せんと。

X先生：いや、そんな難しい話をしているわけじゃないよ。利害対立が解消するわけではなく、単に折り合いをつけるに過ぎないことを、何か正しい結論でもあるかのような錯覚をして、利害関係を超越したような立場で結論を出すのは変だという話でしょう。制度として確立して実際に存在している政治的権力は、継続的に維持されますから、

腐敗の度合いは深まりますよね。それを任期を定めて、一応再組織することになっているわけですね。でも、専門化して、固定化しますよね。討議型民主主義の場合は、問題ごとに組織する。内容が先だとK君が言うのは、その一面は保障されている。ただ、「理性的」とか「公平」とか、「ここに真理がある、ここに跪け」みたいな思考が気に食わんということでしょう。

K男：ええ、そうです。だから、所詮利害対立の調整なら、当事者にやらせろということですよ。

E男：そしたら、参考意見としてなら良いわけですね。第三者の意見も聞いて見るということなら。

K男：そこいらで妥協します。でも、そうすると、これまでもあった、いろいろの審議会と変わりませんよね。それがいい加減になっているから、ちょっと考え直すというに過ぎないんじゃないんですか。

X先生：なるほど。V先生も言っていたけど、「討議型民主主義というのは、政府や行政にとっては、民意を吸い上げたと言い張るための道具としてきわめて都合の良いものだ」という人もいるらしいけど、所詮それだけのものという気もしますが、でも、民主主義の学校だと考えれば存在意義はあるでしょう。もちろん、その場合も、民主主義というのは支配の一形態だということを忘れてはいけませんけどね。それに、「住民参加」という言葉がはやったり、「住民参加というのはおかしい、住民が主体なんだから、行政が住民のところに参加すべきだ」という話しも昔ありましたよね。

E男：目くそ、鼻くそを笑う、とかまた言いたそうですね。

X先生：そこまで口は悪くない。それに、討議に参加した人たちが、自分も社会的問題にかかわった、政治に参加したと、充実感を持つのは大事なことです。ただ、それはそのまま落とし穴だとも言えますけどね。そのまま刈り取られる。

F子：なんですか、それ？ 諦め？ 悟るのはまだ早いでしょう。

X先生：いや、そうじゃなくて、わかった上で、精一杯足掻く以外にないという話です。われわれがなにをやろうと、支配の側から絶えず包摂され、国家は再組織されていく。そのかぎり、さまざまな運動は敗北せざるを得ない。でも、それを覚悟

の上で、新たな運動を繰り返し組織する以外にないと思うのですよ。

D子：それで、いまだに地域通貨なんかにかかわっている。

X先生：それもあるけど、いまだに君たちと付き合っていることの方が…。無駄と知りつつ。

B子：なに言ってるの、来ないと寂しがらくせに。

3 地域社会の再編

E男：それこそ、目くそ、鼻くそを笑う、じゃないですが、地域通貨はどうなんでしょう。やっぱり、飼いならされていくとも言えますが。

X先生：そうきましたか。いや、そのとおりで、しばらくこれで遊ばせておこうということじゃないかとは思うんですよ。政府も地方自治体も商工会も、地域通貨に補助金を出しているわけですからね。最初は税務署なども問題視した。でも、そんなたいした規模にもならないし、何か夢中にするものを国民や住民に与えておいたほうが良い。お祭りも各種のイベントも同じで、それに夢中にしておけば、国や自治体の安定は図れる。

E男：そういえば、昔、フォークソングが反体制的要素を持っていたのに、テレビ出演が叶って、おまけにNHKにまで出演できるようになって、有名人になって、金も稼げるようになると、飼いならされていったようなものですね。

X先生：そうか、E君は、ギターも弾くしフォークソングも好きなんですよ。地域通貨なんか、そういう意味では、最初から、肝いりですからね。私なども、その補助金で講師料などもらっているわけで、後ろめたさはありませんよ。あれば良い訳でもないですけどね。でもまあ、それを言い出したら、みんな自殺する以外になくなりますから。というのは、これはまたゆっくり議論したい問題ですけど、福祉施設などに就職した卒業生の労働条件や賃金など考えたら、われわれは、福祉奴隷の手配師じゃないかとさえ思えてきます。

B子：そうよ、先生。大学でちゃんと労働組合の作り方とか教えんといかんのよ。

X先生：それで済めば簡単なんだけど、できる前につぶされて、排除されて終わりでしょう。それに、労働者が労働条件の改善のためだけの運動を組織するというのは、面白くない。それがいかん

などという気はないけど、たとえば福祉施設などで働く労働者は、その施設の経営、利用者にとって快適な施設運営をどうするかという観点から、自分たちの労働条件も考えないと、面白くないでしょう。現在進められている「格差社会」、「自立支援法」など見ると、要するに、国や自治体は、国民や住民の生活に責任は持たない、とっているわけでしょう。当然責任を持つべきだという要求は、原理的に正当だと思いますし、必要だとは思いますが、他方で、そうした国や自治体の方針に対して、自分たちの生活は自分たちで守っていく、国や自治体は頼りにしない、というのも一つの方向だと思うのですよ。

K男：そうすると、面倒見てくれない国や自治体には、税金も納めないということにもなりますね。

X先生：国や自治体は、国民や住民の面倒を見るということで組織されているわけですから、論理的には、そうですね。面倒見なければ税金は払わない。運動としては難しいけど。一定の力を持てば、当然の成り行きです。

D子：ふーん、で、その「力」って何ですか？

X先生：住民の生活の組織化、それがどこまで可能かという問題です。

D子：なるほど、そこで「地域通貨」のご登場というわけですか。先生が強調していた「利潤動機によらない労働と資源の配分」というのはそういう意味だったのですか。

X先生：まあ、そうです。利害関係者を集めて、圧力団体を作るのもいいですよ。それに、労働者の組織化は困難で、労働組合も買収されてしまったけど、彼らは消費者でもあるというところに目をつけて、消費者の運動を組織しようという考えもあります。それはそれで結構だと思います。それは、たとえば、「安全な食料」を求める運動として、これまでも一定の役割を果たしてきたわけです。

D子：でも、そういうのは、先生の好みには合わないんですね。

X先生：そうです。圧力団体というのは、圧力をかける相手に「おんぶに抱っこ」ですからね。生活の組織化というと、ちょっとかたぐるしい感じがしますが、生活のあり方、どんなことに生きていることの意味を見出すか、普通に言われている言葉だと、新しい価値観に基づいた生活の再編み



たいなものが必要だと思うんですよ。

E男：ちょっと面倒な問題ですね。人間が生きているということはどういうことか、人間とは何かという問題を直接抱えることになりますね。

F子：それで、生物学、脳科学、心理学、精神分析、哲学などをいろんな分野のものを読んでいらっしゃるんですか。

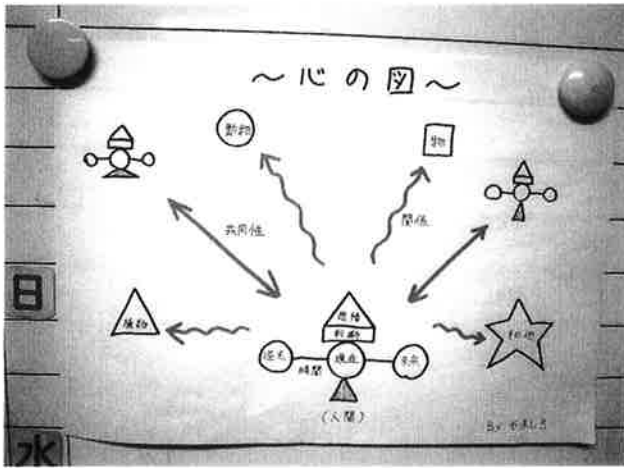
I子：それで、学生はいろんなもの読まされて迷惑している。2年生のときたまたま「地域社会学」の授業で研究室にきたら、木村敏の読書会に参加させられて、色彩心理学やりたいといって、ビレンなんか読んでいたら、中村雄二郎は読んだか、メルロ・ポンティは、マルクスは、ハイデガーは、ダーウィンは？ とか。読んで、よくわからんと言うと、自分で考えたら、ですからね。おかげで、卒論書くのに、解説書も入れると、100冊以上読まされた。

X先生：おかげで、そんなに読んだのって、他の先生たちにもほめられたでしょう。

I子：でも、ハイデガーの「世界-内-存在」って、どういうことですかって訊いたら、ハイデガーは『ヒューマニズム』では、こんな風にも言ってるよ、とか言って、ロッカーのドアに「言葉という存在の家に住み、人間は、存在へと身を開き、そこへと出で立つ」と紙に書いて張ったりして。そして、何度か訊いたけど、そのたびにニヤニヤ笑って、「憤せざれば、啓せず」だって。あれ、解説してくれたの半年以上後でしたよね。

X先生：いや、その間に私もいろいろ考えていたのです。意地悪したわけではありません。でも、みんな時々、絵に描いたりして、結構楽しんでたじゃない。今では、良い思い出でしょう。

E男：えーと、元に戻って、さっきの「生活の組織化」の話ですけど、わかるような気もしますが、



もう少し、別の言い方で話してもらえませんか。
X先生：そうですね。たまに講義のときにも話したと思いますが、私は、「人権」とか、「平等」、「反差別」などという言葉に、ものすごく違和感を覚えるんですよ。
E男：人権なんか認めない？
X先生：いや、そうではないんですが、「天賦の人権」なんていわれると、「お前、いつからクリスチャンになったの?」とか言いたくなる。「人権」は天が与えたものではないですよ。過去の多くの人々が、それこそ血を流して、命をかけて闘ったものです。そのことに思いを寄せることもなく、「既得権」だと言い張る。単なる妥協の産物だから、守りたければ闘い続ける以外にないのに。それが理由の一つです。それから、人権とか平等とか言って、人間はみんな同じだという、ものすごく抽象的なところで人間を捉えることが嫌いなんです。昔は、神の下での平等、近代国家では法の下での平等、市民社会では貨幣の下での平等でしかないわけでしょう。
E男：それはそれで良いのではないですか。
X先生：なぜ、何に対して、何に比べて良いの？
K男：権力による支配、いわゆる政治的権力だけではないですけど。
X先生：いや、人権とか平等とかの下で、支配は貫徹している。それは封建的な支配、身分制度から人間を解放しただけですよ。
E男：でもそれは、先生がおっしゃったように、過去の人々が闘い取ったものですから。
X先生：それを引き継ぐ、引き受けるというのは、その上に胡座をかくことじゃないでしょう。彼らが果たそうとして、果たせなかったことを引き受

けるということでしょう。
E男：人権とか平等とかいうものをもっと徹底する、拡大するというのでは駄目なんですか。
X先生：でも、徹底する、拡大するってどういうことですか？
E男：実際に存在している人権侵害や不平等、差別をなくすということですかね。
X先生：それが悪いとは言いませんが、そういう運動は、同時に、人権や平等が実現するかのような幻想を振りまくことでもありますよね。それは、「鎖に花を飾っている」に過ぎないんじゃないですか。「人権」や「平等」にわれわれを縛っていく。
E男：現実の運動ってそういうものじゃないんですか。
K男：あの一、そういう運動が墮落し腐敗するのは必然的だということですか。人権とか平等とか現在の社会ではこれ以上進みはしないのに、意味のない主張をし続けている。だって、法の下での平等も、貨幣の下での平等も保障されていますよね。平等というのはそれだけのものでしかないというか。それに「人権を守れ」という主張は、人間を馬や牛のように扱わない、身分制度の撤廃、あるいは奴隷制の撤廃、人身売買の禁止とか、経済的文化的な最低限の生活を保障するとか。そんなものが人間の尊厳ですか？ 「人間の尊厳」って所詮そんなものだと、先生には言われそうですけど。
X先生：うまく行って、人権とか平等というのは、せいぜい枠組みを作るだけのものではないでしょうか。これは、好みの問題かもしれませんが、人間って、もっといい加減なものじゃないかという気がするんですよ。人権とか平等とかで語れるような抽象的存在ではないんじゃないかな。それに、人権とか平等とかいう理念で国家的な統合を図れる時代は終わったともいえる。「格差社会」というのは、一時的な政策というより、これからの社会が向かう大きな方向だという気がするんですよ。少なくとも、中国やインド、中南米やアフリカの経済発展が進んで、資本だけではなく労働の移動も世界的規模で自由に行われるようになるまでは続く、なってもかな？ 「格差社会」がすばらしいなどと言っているわけではありませんよ。でも、人権とか平等というのは、支配者たちが捨て去った旗ですよ。何も、それを拾って、後追いをすること

はないじゃないかということです。

E男：「格差社会」は歴史の必然だということですか。相変わらず、すごい暴論ですね。

X先生：暴論かもしれませんね。でもある意味、必然かもしれませんよ。世界的規模で、社会主義革命が成就してから、そうなればよかったんですけどね。今となっては、格差社会の果てに、自由な個性というものが生まれるのかもしれませんがね。

D子：何むちゃくちゃなこと言ってるの、おじいちゃん。焼きが回った？

K男：むちゃくちゃですかね。なんか面白そうな気もするんですけど。その議論は、「人間なんていい加減なものだ」という話と関係あるんですよ。人間社会は発展しすぎた。あるいは変な方向に行き過ぎた。確かに後戻りは出来ませんが、現代社会に対して、もっと人間というものを考え直して、社会のあり方を考え直さないと駄目だとか。少なくとも、近代社会が掲げた理念が、すでに色あせているのに、そんなものを拾って回ってどうするの、ということですよ。

X先生：まあ、そういうことです。「障害は個性だ」とか言う奴いるでしょう。そんなこと言う奴は、自分の足の一本でも切り落としてから言え、とか思いませんか。一生車椅子で生活せざるを得ない人と、立って、歩いて、走れる人と平等だといって何になります。投票のとき、車椅子の人は2人で1票とか、車椅子の人には、100円のパンも200円で売るとかしないという程度でしょう。平等とか言いたければ、脊椎を損傷した人を立って歩けるようにしてから言え、とか言いたくありません？ 人間はみな平等だと言いたいから、障害は個性だといってみる。でも、個性と平等は両立しない。あるいは平等と両立するような個性は“個性”ではないんじゃないかということです。

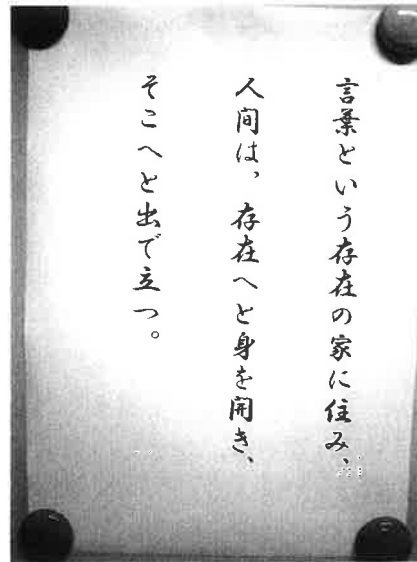
D子：ハイ、それ言葉遊びだと思いまーす。

X先生：まあ、まあ。じゃあ、もうすこし言葉を和らげて、近代社会における「個性」とは違った“個性”を考えるべきだというのはどうですか？

D子：それなら、許してもいい。

X先生：個性というのは、社会的なものですよね。

D子：なんとなくわかるけど、もうちょっと具体的に。



X先生：昔から、「氏より育ち」といいますね。

D子：「遺伝か環境か」という問題は、決着ついていませんけど。

X先生：ええ、ついてません。「氏より育ち」というのは「氏」を否定しているわけではない。でも、「育ち」の方から始めてみようということ、Dさんのお許しをいただいてですね。

D子：ハイ、ハイ。

X先生：「個性」というのは、他人との共通性も含めて、個の全体を指しますよね。でも、しばしば、他人との違いをさすことが多いのですが、それはなぜですかね。

D子：共通性が前提されているから。

X先生：そうですね。共通性が前提にされているから、そのときの共通性って何ですかね。「共通性」は時代の支配的な枠組みのなかで作られたものに過ぎないんじゃないんですか。その共通性があるから、個性的に育てるなんてことが言われるわけですね。それはなぜですか。

D子：他の人と違うことが、現在の社会で意味（価値かな？）を持つから。

I子：個性的に育てるということに価値があるかのように吹聴されるから、「個性とは何か」について考えもしないで、おっちょこちょいの親や教師が、踊らされている。

X先生：誰が、何のために吹聴しているのですかね。

I子：たとえば、ちょっと前だと、学校教育なんかで、全国的に平均化して子供を育て、学力を基準にして一面的に序列付けをしてきて、それでは

平均化しすぎて、変化に耐えられない企業や組織が出来て、企業や組織が危機感を持ったから。

X先生：学力という平等の基準で、その偏差が個性。あるいは、特技とか、場合によっては性格とかで、内容はいろいろですけど、「個性的」であることが何か現代の社会で価値を持つと考えたからですね。要するに、社会が何かそういうものを要求していると感じたからですね。

D子：社会の要請によって、「個性なるもの」が作られる。だからその社会に価値ある個性が作られる、ということですね。そういう意味で個性は社会的に作られる。

X先生：スミスも『国富論』の中で、才能の差と見えるものも分業の原因ではなく、むしろ分業の結果であるといっていますね。ちょっと違った角度から考えて見まじょうか。人格心理学などで、パーソナリティについて語られますね。そのとき「パーソナリティ」って、「性格」とほぼ同じ意味ですね。「パーソナリティ」の語源は、みんな知っているように、ベルズナ（仮面）ですね。仮面は、舞台の上で、役者が観客の前に自分を表すものです。

D子：他人が、自分をどう見るかを意識している。

F子：いや、それだけではなくて、他人が自分を見たいように見せたいという気がある。他人の期待にこたえようとする。両方の意味で、他人がいなければ、そもそも個性などないとも言える。生まれながらの個性というものが有ったとしても、他人との関係の中でしか、個性は現れない。

D子：ほー、それ、ラカンですか？

F子：いや、ラカンは面倒だから、でも、マルクスも『資本論』で「人間は鏡を持って生まれてくるのでもなければ、私は私である、というフィヒテ流の哲学者として生まれてくるのでもないから、人間は、最初はまず他の人間の中に自分を写してみるのである」とか言ってます。

X先生：「価値鏡」の話ですね。Fさんが、今引用した文の後まで見るともっとはっきりします。「人間ペテロは、彼と同等なものとしての人間パウロに関係することによって、はじめて人間としての自分自身に関係するのである。しかし、それとともに、また、ペテロにとっては、パウロの全

体が、そのパウロ的な肉体のまま、人間という種族の現象形態として認められるのである」という文章が続いています。狼に育てられた少女の話なんか考えるとよくわかりますね。でも、人間に育てられても狼は人間にはならないという問題はありますけどね。

F子：でも、犬には成れる。

X先生：そう、犬にはなれるんですよ。慣れるうちに成れる？

D子：また、バカ言っって。

X先生：はい。ごめんなさい。元に戻って、さっきの引用の少し後には、「たとえば、ある人が王であるのは、ただ、他の人々が彼に対して臣下として振舞うからでしかない。ところが、彼らは、反対に、彼が王だから自分たちは臣下なのだと思うのである」とかいうのがありますね。

D子：でも、世襲というのがあります。

X先生：えっ、それお返しですか？ でも、生まれてくるのは単なる赤ちゃんですから。王の子として生まれてくるだけです。

D子：あー、そうか。

X先生：そのうち、「われは王である」とかいつて生まれてくる赤ちゃんがいたりして。

B子：皆さーん、どちらにおいでになるのですか？ おじいちゃん、一応船頭なんだから、しっかりせんと。自分も成り行き任せでどうするの。

X先生：ハイ、そうでした。個性というものが社会的に作られる、というだけではなく、個性というものがそもそも社会的なものだということですね。

D子：だから、それはそうだけど、そういう考えで行くと、氏、遺伝の問題は、どうなるのですかって。

X先生：さしあたり、遺伝で受け継がれるものも、過去の関係、経験の体化したものといえる。ただ、「本能」と呼ばれるものを、どう解釈するかということは残ります。これは、廣松さんみたいに、素粒子レベルまでさかのぼって²⁾、「関係の第一次性」で逃げるわけには行かないでしょうね。

I子：じゃあ、単細胞まで、核酸まで？

X先生：フロイトみたいに鉱物まで戻っても同じだから、最初の有機物、核酸まで。神さまが創っ

²⁾ 廣松渉『哲学入門一歩前』講談社現代新書、1988年。

たそうだから。

B子：「神様」？ また、なんか変なこというんでしょう。余計なこと言わないで、ちゃんと話さない。

I子：先生、さっと言いなさい。「雷」が落ちたから。

X先生：なんだ、Iさんは知っていたのか。「神」という漢字は、稲妻の形から出来た象形文字です。正体がわからないから、得体の知れない恐ろしいもの。上の方で鳴るから、上鳴りという話も有ります。で、ですね。核酸は、雷の衝撃で出来たという話です。

I子：核酸が自己複製を作るということから始めようということですね。

X先生：そう、それから細胞膜ができる。でもなぜなんだろう。木下さんは、核酸分子の周辺に潤沢にあった自己複製のための素材やエネルギーが乏しくなって、ある偶然から溶液の一部がある種の膜によって区切られることになって、細胞が誕生したとっています。「素材やエネルギーを確保するために」とでも言いたげですが、そうするとこの時点で、すでに意思があることになりませんが、そこまでは言っていない。でも、「自己複製によって再生産しようとしているのは、自己としての個性であり、他の個性ではない」のだそうです³⁾。

I子：「個性」ですか。それに、膜を作るのが「意思」かどうかは別にして、環境の変化に対応して、自己を変化させたものは、存続し、対応できなかったものは死滅するとは言えるわけですね。

X先生：そう、変化したのではなく、変化させたのかもしれない。多細胞の「固体」が出来ると細胞間をつなぐ神経が現れるし、その中枢化が発生し、細胞間の分業が成立する。体細胞と卵細胞が分かれ、やがて両性の分離がおこる。生物学の話は本を読んでもらうことにして、両性の分離というのは進化という観点から重要だというだけではなく、「社会」の形成という観点からも重要な気がしますね。

I子：それって、社会ですか？ サルの社会とは言うけど、植物の社会なんていいませんよね。

X先生：でも、固体が自己の存続のために他の個体を必要とするという意味では、言えないこともない。それこそ両性が分離しなくても、群生だけでも他の個体を必要としているともいえる。

I子：それは、ただ、一定の環境の中で、偶然集まっただけでしょう。

X先生：偶然であったとしても、そのことが個体の存続に影響を与えてくるし、それが必然に転化するということはあるんじゃない。

D子：それで、おじいちゃんとしては、何が言いたい。

X先生：遺伝と環境、氏より育ち、先天的なもの(本能)と後天的なものとか、相反するもののように言われてきたことを、どう捉えていくかということですか。

I子：たとえば、廣松さんみたいに、「関係の第一次性」とかで、全部捉えようということですか？

X先生：いや、「本能」といわれているものも歴史的なものだということ、そうでなければ、本能というものも、自己存続の衝動という以上のことは何も言えない。生命は確かに環境との関係、他の個体との関係の中で変化するにしても、歴史的には一定の時点では、「個体」の中に体化されているということ、そしてその個体が新たな関係を結ぶというように捉えたら、説明が出来ないかなと思っているわけです。それはちょうど、脳が、進化をその構造として取り込んでいるようなものかな。

F子：それって、『資本論』の論理じゃないですか。物化とか物象化とか。

X先生：バレたか。『資本論』も、生命や生物の問題もこんなに簡単じゃないけどね。

D子：それで？

X先生：なにが？

D子：また、ごまかす。だって、「生活の組織化」から話は変な方向に来てしまったのですよ。

4 社会改良運動としてのソーシャル・ワーク

X先生：ハイ、そうでした。だからね。新しい生活の組織化、地域社会の改革というのは、地域で

³⁾ 木下清一郎『心の起源 — 生物学からの挑戦 —』中公新書、2002年。



生活をする人々のなかに、その根拠がある。人々が持っている感情や思い、不満や願望、希望と絶望、現実との矛盾のなかに出発点がある。社会関係や社会の矛盾というのは、中空に浮かんでいるわけではない。それは、諸個人の「個性」として体化しているし、社会の変化は個人の対象的活動の中からしか生まれえない。それは、現在の社会体制や政府の政策の批判としても現れます。でも、社会体制や政府を変えれば、理想的な社会が現れるわけではない。たしかに、地域の生活といっても、現代の社会では世界的な規模での経済的・政治的・文化的諸関係とつながっています。それをあえて、地域社会の日常生活のなかでの人と人との関係、地域社会のあり方、一人の人間のかかわり方でわずかでも変えうる場面で、新しい人間関係＝社会のあり方を見直してみようということです。

マルクスは人間を受苦的存在、つまり欲求の対象を自分の外にもっている存在であるといいます。そうして、欲求の変化に歴史の推進力があるといいます。言い換えると、人間は、欲求の対象を外部に持っているがゆえに、対象的活動をせざるを得ない。この対象的活動は、対象を変化させるだけではなく、自分自身を変化させる。変化した自己と変化した環境との関係は新たな欲求を生み出し、新たな欲求に基づく新たな対象的活動を促迫するということです。

D子：そんなに一般化してなんか意味あるのかなー。

X先生：政治体制や経済的システムが変わっても、それを支えるのは一人一人の人間ですよ。それも日常的生活意識、そこでの人間関係、そのところが変わらないとなかなか難しい。日常

的な生活における人と人との関係は、部分的には変えられる。それを、一定の狭い地域的な世界の枠内で変える運動は、新しい“個性”を育てるという意味があるんじゃないかということです。

D子：それはわからんでもないけど、具体的には、どんな風になるの。地域通貨の運動を、そんなことを考えながらやっているのかー、とは思うんやけど。

X先生：地域通貨の運動で私が考えていることは、食糧など、部分的で良いから生活の基礎を地域社会の中で確保できないかということです。今、先生たちと話したり、考えたりしていることは、ソーシャル・ワークというのを、社会改良運動として再組織すること。

D子：社会改良運動ですか。単に社会資源を活用して援助するということでは駄目なんですか。

X先生：駄目とはいいいませんが、その「社会的資源」というのが気になるんですよ。人間は材料じゃありませんからね。お互いに相手を手段として利用しあっているという感じになっちゃうでしょう。

D子：生活保護受けて、のうのうとしている人を、何で生活保護以下の賃金で、私が世話しないといけないの、という気にもなるけどねー。

B子：そうよ、何も出来ん上司にこき使われながら、あんな人に高い賃金払うなら、こっちに回せって。

K男：先輩たち、大変なんですね。

X先生：このまえ来た卒業生は、家を朝5時半に出て、家に帰ってくるのは毎日、23時半だといっていた。文字通り殺人的です。このままでは、ほんとにわれわれ教員は、「福祉奴隷の手配師」ですよ。

B子：「福祉は愛だ」とか言う人もいるけど、私は「愛の殉教者」なんかじゃあないからね。

X先生：こんな話、外でしたら、袋叩きですよ。「差別」だの、「福祉の心」がわかっていないだとか。

K男：先生が、「障害者」を障害者としてしか見ない関係では駄目だとおっしゃっていましたが、そのこととも関係ありますね。福祉従事者は、従業員でしかないことになっているわけですね。人間ではない。「人権」だの「平等」だのは、その上に乗かっている。

X先生：車椅子に乗っているS君は、私との関係ではS君なんです。S君は、ちょっと大胆で面白い学生です。そのS君は、車椅子に乗っている学生でもある。それは「障害者のS」君というのとは違いますよね。

D子：「言葉遊びだ」と言うともた怒られそうだから、止めとくけど、どういうこと？

X先生：Dさんは、Dさんの両親との関係では娘です。私にとっては、かわいい卒業生です。

B子：「かわいい」は余計です。

X先生：はいはい。かわいい卒業生のBさんにとっては、Dさんは仲の良い友達です。

B子：それなら良い。

X先生：人と人との関係は、いろいろでありうる。「全人的関係」という言葉が流行ったことがありますが、現在の社会では、お互いに手段化した関係が支配的になっている。相手の一面とだけかわわっている。医者と患者、教員と学生、売り手と買い手、雇用者と被雇用者、健常者と障害者、利用者とワーカーなどです。一面的なかかわり、相手を手段としてのかかわりでは駄目だということで「全人的関係」といってみる。患者でなく人間として見る、病気を治すのではなく、病人を治すと言ってみる。でも、それはどういうことですか。私みたいにひねくれ者は、病気を治してもらえよいいので、あなたなんか私を治してほしくなかないうと言いたくなります。

D子：それは分かる気がする。

X先生：で、苦し紛れに「愛」とか言ってみる。「愛」も「全人的関係」もそれはそれで良いですよ。でもむなしいでしょ。現実的根拠があるかどうか疑わしい。

D子：家族内の関係は？

X先生：そこまで暴きますか？ 何年か前、福祉予算の削減をしようとして、政府が、「家族は含み資産だ」と言ったことがありますよね。障害者への行政サービスを切り詰めようとしての発言です。政府から見れば家族関係というのは、費用節約の関係として利用すべきものということです。社会が家族をそのようにみていることに問題を感じる人は多いと思いますが、家族だけがお互いを手段としてみる社会関係から自由でありうると思いますか？ 親殺し、子殺しのニュースは毎日流されています。マスコミで取り上げられる「DV」

は、氷山の一角でしょう。事件を起こさない家族には、問題はないですかね。

マルクスは、「子供は、親によって、親を通して搾取される」といっていますが、親は、社会に合うように子供を育てます。それが親の「愛」というものです。子供は親や教師の中に社会の醜さを見出し、反発しながら、多くの場合は巻き込まれ、あるいは社会に背を向けて育ちます。病気になってしまう子供もいます。青少年の健全育成とか言いますが、「健全」とは、社会に合った人間になることです。「支配的な思想は、支配者の思想」ですからね。

D子：じゃあ、どこに希望はあるの？

X先生：そうしたさまざまな問題を改革していこうとする運動の中でのお互いの連帯しかないと思います。そこに新しい人と人との関係が生まれてくるかもしれない。そこに希望がある。「社会改良運動として、ソーシャル・ワークを再編しよう」というのはそういうことです。それは、エコ・マップなど作って、行政サービスを充実させようということに止まらず、地域社会の生活、衣・食・住を基礎にした新しい関係を作っていくということです。人間の生命活動である社会的な物質代謝、外的な自然との関係、人と人との関係をどのようにつくっていくかが問題の基本です。単に就労支援をすれば良いということではない。援助活動も含めて、労働というものを根源的に考え直さなければ駄目です。マルクス流にいうなら、「労働」は、「生命活動」の疎外されたものですから。

今、われわれも一緒に作りつつある、いくつかのネットワーク、卒業生のネットワークもその一つですが、その他にもさまざまなものがありますし、各種のNPO組織や地域通貨の運動なども、その中で意味を持つと思います。「変わらないものを流れに求めて、時の流れを止めて変わらないものを求める者たちと闘うために」ですよ。

E男：「中島みゆき」ですか、過激ですね。

X先生：思想は過激に、根源的に、行動は穏やかに。改良主義の極意です。

B子：チャン、チャン。はい、みんな、呑みいこう。